





1 作物

項 目	作 業 内 容
(1) 麦の播種	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○麦の播種 ○大豆の収穫 <p>11月は麦の播種、大豆の収穫作業の時期である。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多い見込みである(10月19日高松气象台発表)。この時期は天気が周期的に変化しやすいため、ほ場作業は計画的に行う。</p> <p>ア 種子の準備</p> <p>麦は自然交雑が起こりやすく、自家採種を続けると品種特性の劣化、混種や変種が起こるため、2～3年に1回は種子更新を行う。</p> <p>また、種子伝染性病害(裸黒穂病、斑葉病など)を防除するため、種子消毒を必ず行う。消毒作業については「今月の天候と農作業(10月)」を参照する。</p> <p>イ 土づくり</p> <p>麦の土壌適正pHは6.2～6.9である。土壌pHの低い酸性土壌では生育不良をきたすため、石灰質資材を連年施用する(苦土石灰の場合:150kg/10a程度)。</p> <p>ウ 湿害対策</p> <p>播種期の多雨は湿害を引き起こし、出芽不良や減収を招くため、湿害対策は万全に行う。前作が終わったら、額縁明渠を早めに施工し、弾丸暗渠や心土破碎を行い、播種までにはほ場の乾燥に努める(写真1)。</p> <p>土壌が適度に乾燥した状態で耕起を行い、速やかに播種も済ませる。耕起後に降雨に遭遇すると、播種作業ができず作業遅延を引き起こすため、天気予報に注意し効率的な作業計画を立てる。</p> <p>播種後、深さ15cmの排水溝を2～3m間隔で設置し、停滞水が確実にほ場外へ排出されるよう排水溝と導水路を接続しておく(写真2)。</p> <p>溝の深さが15～20cmの畝立て同時播種とすることで、苗立ちが良好となり、播種時の湿害を軽減できる(写真3)。</p>

項 目	作 業 内 容
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真1 額縁明渠の施工</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真2 排水溝と導水路の接続</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  </div> </div> <p style="text-align: center;">写真3 畝立て同時播種 (左：畝立て版を両側に設置、右：畝立て版を片側に設置)</p> <p>エ 播種適期 ハルヒメボシの播種適期は、11月15～25日で、11月上旬以前の極端な早播きは、過繁茂になりやすいため避ける。 小麦の播種適期は、収穫期の雨による大幅な品質低下を防ぐため、はだか麦よりやや早播きが望ましく、チクゴイズミでは11月10日～20日である。しかし、早播きと暖冬が重なると早期出穂し、霜害を受け不稔になる恐れがあるので極端な早播きは避ける。</p> <p>オ 播種量 1㎡あたりの出芽数の目安は、ドリル播栽培では150本、全面全層播栽培では200本程度である。10aあたり播種量の目安は、ドリル播栽培（条間20cm）で8kg、全面全層播栽培で15kg程度である。ただし、ドリル播栽培で播種期が早い場合は6kg/10aである。また、播種期が遅いほど出芽率が低下するため、11月25日以降の晩播きの場合は、5日遅れる毎に播種量を1割増量する。</p> <p>カ 播種深度 播種深度が深いと出芽率が低下し、その後の生育が極端に悪くなる。また土壌が過湿の状態では播種すると機械が沈み込み、播種深度が深くなりやすいため、事前には場の乾燥に努めるとともに播種前には入念に機械の深度調整を行う。</p>

項 目	作 業 内 容																					
(2) 大豆の収穫	<p>ドリル播栽培では耕起深5～10 cm、播種深1～2 cm程度を目安とする。また、全面全層播栽培では、1回耕の場合は耕起深を8～10 cm、2回耕の場合は播種前の耕起深を10 cm、播種時の耕起深を5 cm程度とする。</p> <p>キ 施肥量</p> <p>基肥は、ドリル播栽培では10 aあたり窒素・リン酸・カリを5～7 kg・6～8 kg・8～10 kg、全面全層播栽培ではチッ素を8～10 kgとする。過剰な施肥は過繁茂を助長し、倒伏や品質低下の要因となるので避ける。また、はだか麦の遅播きでは肥効調節型肥料を用いた全量基肥施肥は避ける。</p> <p>なお、はだか麦で黄枯れ症状や枯熟れ症状が発生しやすいほ場では、追肥重点型施肥にすると減収を回避できる場合がある（追肥重点型施肥：基肥量を減らして過繁茂を抑制し、葉色に応じて中間追肥を分施する施肥方法（表1を参照））。</p> <p>表1 はだか麦の追肥重点型施肥の施肥体系（チッソ成分kg/10a）</p> <table border="1" data-bbox="544 1055 1305 1249"> <thead> <tr> <th rowspan="2">施肥法</th> <th rowspan="2">基肥</th> <th colspan="2">中間追肥</th> <th>穂肥</th> <th rowspan="2">計</th> </tr> <tr> <th>12/下</th> <th>1/下</th> <th>2/下</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>慣行</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>12</td> </tr> <tr> <td>追肥重点</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>13</td> </tr> </tbody> </table>	施肥法	基肥	中間追肥		穂肥	計	12/下	1/下	2/下	慣行	7	0	2	3	12	追肥重点	4	3	3	3	13
	施肥法			基肥	中間追肥			穂肥	計													
12/下		1/下	2/下																			
慣行	7	0	2	3	12																	
追肥重点	4	3	3	3	13																	
<p>ほ場内の雑草や青立ち株は、汚粒の発生原因となるので、収穫前に除去しておく。</p> <p>収穫適期については、大豆の茎水分が高いと汚粒の発生が増えるため、茎水分が50%以下になってから収穫を始める。その目安は、茎が黒ずみ、手で容易に折れる状態である（写真4）。また、子実水分は18%程度が収穫適期である。これよりも高いと潰れ粒、低いと裂傷や割れ豆などの損傷粒が生じやすくなる。収穫時刻は、汚粒の発生を少なくするため、茎や莢が乾燥する午前10時以降を目安とする。収穫後は、子実水分15%に仕上げ乾燥し、選粒機を用いて莢雑物や被害粒を取り除く。</p> <div data-bbox="956 1518 1369 1809" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1027 1809 1299 1843">写真4 大豆の収穫期</p>																						

(作成 農林水産研究所)